

---

# ねえ、もう一度微笑んで...?

悦威カイ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ねえ、もう一度微笑んで…？

### 【Nコード】

N1928T

### 【作者名】

悦威カイ

### 【あらすじ】

僕がもう一度、あなたに出会えた時…

微笑んで…？抱きしめて…？

死ネタ 銀新、BL。

第一話 ドッキリだよね？カメラ探すから、マジで。(前書き)

死ネタです。銀新、銀ちゃん死にます。

嫌な方、苦手な方は、はい！back！！

第一話 ドッキリだよね？カメラ探すから、マジで。

嫌な予感がしたんだ…

なんかもやもやっど…

起きたらなんかみんな泣いていて…でもあの人の姿はなくて…

そして連れて行かれたのは…

愛するあなたの、寝顔の前だった…

「銀さんツツ!!」

静かな場所に響く僕の声。

何度も何度もあなたの名を呼んだ。

返事はない。

ただ悲しく、虚しくこの場にいる皆の心に響いた。

「銀さんっ 銀さんっ!! なんで? どうしてっ?」

「新ちゃん!!」

「銀さん!! 僕ですよ!! 銀さん!!」

僕を止める姉上の腕を振り払い、静かに横たわるあなたに抱き着いた。

「新ちゃん!! 銀さんは、銀さんは……!!」

「銀さん?! 銀さん!!」

いつもの寝顔なのに、どこか悲しい。何か足りない。

動かない。笑わない。冷たい…。

「銀さんは…亡くなったの…死んじゃったの…」

静かに…僕の心をえぐったその言葉。

「え…？ヤッ…やだなあ！！僕は騙されませんよ　　！！」

嘘だよね？冗談だよね？銀さんが死ぬなんてあるわけない。ドッキリだ！そうだ！そうなんだ！！

そう信じたかった…それは、僕の逃げだけど…

「本当だ…君の目の前にいる男は…死んだんだ…」

泣き崩れる姉上の言葉を代弁でもするかのように、近藤さんは言った。

「嘘じゃないアルヨ…新八い…銀ちゃんは…死ンジャツタネ…」

神楽ちゃんも言った。それと同時にその場に崩れこんだ。

沖田さんがさりげなく神楽ちゃんに寄り添った。

嘘だ…そう言いかけた。

「銀時は…もうそこには居ないんだ。新八君。」

桂さんは言った。隣にはエリザベスもいた。

見渡すとみんないた。銀さんの仲間。助けた人。あの高杉さんもいる。

真選組も、マダオも、月詠さん達に、お登勢さんもキャサリンもた

まも…皆…

そして皆…泣いていた。揃って泣いていた。

僕は銀さんの顔を見た。

「ぎ…んさん？」

静かに眠っていた。冷たかった。

僕はこの冷たさに覚えがあった。銀さんと出会う前…お人好しな親

父の様な冷たさ…

涙が一筋流れた…

第一話 ドッキリだよな？カメラ探すから、マジで。(後書き)

悦威「銀新で、死ネタ…さて…」

死ネタって残酷描写!？」

渚「知らんがな!!」

携帯の方、読みにくくてすみません。



第二話 人間追い詰められた時本当に頼るのは、冷静な判断より、優しさである

ほほ、お妙さん視点。

第二話 人間追い詰められた時本当に頼るのは、冷静な判断より、優しさである

貴方の笑顔が凍った日…

最後まで最後まであなたの名前を呼んでいたの。

それが憎かった時もあったけど…銀さんはね、

本当に新ちゃんの事……………

大切にしてたのよ…？

新ちゃんは、その真実を知った。

「新ちゃん…」

思わず駆け寄ろうとする。

だって新ちゃんが泣いている。悲しんでいる。

新ちゃんの居るところへ駆け寄ろうとした。

ガシッ

私の行動を誰かが止めた、大きな手。あの人と同じ。そつと振り返った。淡い期待と共に。

だけどそれは、私に付きまとうストーリーカーゴリラ。

「離してッ！！」

「お妙さん。」

私の名を呼ぶ。シカトしたいけど、私のお水の血は返事をする。

「何よ」

溢れそうな涙をグッとこらえ、少し漏れた涙を拭った。

静かにヤツの顔を見る。キツと真っ直ぐ。だけど嫌そうに。

「無理はしないで下さい」

その言葉に少し涙腺が緩む。女は嫌だ。

「無理なんかしてないわ」

その言葉に奴はそつと私の肩に置いた手を引いた。

そして視線を私から、新ちゃんの居る前の方に移した。

つられて前を見る。そして新ちゃんは…

そつと…キスをした。銀さんの唇に…

私は目を疑った。その行為に。  
死人にキスなんてありえない。  
でも…

「二人は、本当に愛し合っていたらしいな…」

私の気持ちを、代弁した。まるで分っていたかのように…

「お妙さん、新八君は大丈夫だ、とりあえず…お妙さんも…泣いていいんです…」

そして静かに微笑んだ。やっぱりゴリラみたいだけど。優しく。

「新八君に見られたくないなら、見張ってあげますよ?…」

涙の痕だらけの顔で、暖かく…笑った。

「それとも一人になれる所を、探しましょうか？」

その時知った…いや、ずっと目から知っていた。

「お…お妙さん?!」

「ここでいいわ…泣かせて…」

そつと手を伸ばし、広すぎるその胸に顔を埋めた。  
泣いた…ただ静かに…

第二話 人間追い詰められた時本当に頼るのは、冷静な判断より、優しさである

お妙さんと近藤さんはイイ仲にします。

だって俺近藤さんお気に入りなんだもん。

土方は嫌いだけどな。ハハッ。



第三話 天国にはお菓子の家があることを祈りたい。(前書き)

すみません。変えまくりです…。

銀さん視点。

第三話 天国にはお菓子の家があることを祈りたい。

ココは…

どこだ…？羽生えてるし。わっかは？

天国？え？お菓子の家無いの？

マジ？超ショック…

死んじゃったんだ…銀さん…

「新八…泣いてねえかなあ…」

「約束したのになあ…お妙と…泣かさないうって…」

「神楽どうすんだろう…万事屋どうしよう…」

苦悩してた。天国「ココ」に来てまで…

「新八に…逢いたい…」



**第三話 天国にはお菓子の家があることを祈りたい。(後書き)**

江藤「もうすでに想像を超えた。

なんかBLじゃなくてよくね?？」

渚「…お菓子の家が…」

銀さん「俺、もうしばらく出番ないかも…ってマジ?!」

#### 第四話 お墓参りは大福を食べたいが為について行く。

「新ちゃん。喪服…着替えたら？」

「……………」

返事こたえはない

泣いている…

新八は只どこかを見て泣いていた…

「…新ちゃん…」

ピンポーン

チャイムが鳴る。

「どーもーお妙さーんー!!」

陽気な近藤ユウリョウの声が聞こえる。

妙はため息をつきながら立ち上がった。

妙は笑顔であれを渡した。

「はい。バナナ。それじゃ」

ガラガラ

「…どうしやす？近藤<sup>ユウラ</sup>さん」

「ほんとかよ近藤<sup>ユウラ</sup>局長想いが通じたあ…なんて」

「…は…はははははん…」

ガッターンっ！！

「っってお妙さ　　？ん！？

冗談きついですよおおツッ！！！？…？…？」

「あら…本気だったんだけど…？」

笑うお妙。

「何しに来たアルか？お前ら…」

奥から神楽が現れる。

「何でここに居るんでい？お前」

「居候ネ。」

「…んで？アイツは？」

土方ムツが言った。

「…アイツ？」

全員すつとぼける。

「アイツだよアイツ！！新八の事だよ！！」

「ああ…新ちゃんなら…あそこに…」

縁側に座る新八。

「お邪魔するよ。」

土方が乗り込んだ。

第五話 シンデレ野郎はいざって時にもシンとする。(前書き)

珍しくマヨ視点。とてもキツイっス。

この自己満足小説…終わるかなあ…ははっ。



第五話 シンデレ野郎はいざって時にもシンとする。

小さな背中。一筋の涙…

いつも、いつもいつも、全て銀時アイツのモノで、

手を伸ばしても、届かない…

「オイ、メガネ。」

今もほら、声しかかけられないじゃないか…

.....

「へたれ。」

ぼそりと総悟が言った。

ワザと聞こえるように言った。

「…新八…くんっ？」

裏返ってるし。声が。

「ふぬけ。」

また総悟は言った。

そして新八の背中を見る。  
目を凝らさなくても分かる。

その小さな背中を包み込むかのような暖かい空気…

・

ああ…まただ…

この想いは伝わらない。伝えられない。

「…銀時…」

背中ひだまじの影にそつと呟いた。

「え…?」

その名前に反応して振り返る。  
ムカつく。なんかムカつく。

「喪服シムレ脱げよ。」

君を縛り付ける鎖に見えて…  
君の心を閉ざす鎖に見えて…

「脱げよ!!新八い!!」

手を伸ばす。

「嫌だッ!!やめて下さい!!」

無理やり喪服くさじを掴む。

「嫌だあツツツ!!」

泣き叫ぶ。だけど誰も俺を止めない。皆が望んでる。  
新八が…その鎖かぎを断ち切ることを…

「ヤダっ嫌!!銀さんっ!!」

何度も呼ばれつ続ける名前。  
もうここには居ない名前…。

「銀さんっ銀さん銀さん!!!!」

助けになんか来られねえ奴の名前。

「銀さん銀さん銀さん銀さん銀さん銀さん銀さん…」

もう十分だろっ!!もう死んだんだ!もう死んだんだよ銀時アイツは!!!!」

「嫌だ…嫌だツ…」

抱きしめる。君の涙を隠す。

「俺を見るよ…銀時アイツじゃなくて…俺を見てくれよ…」

強く…なるべく強く抱きしめる。

細く華奢な君…

流れ出す。止まらない涙<sup>おもい</sup>…

「俺の事を…ちよつとくれえは見てくれ…新八…」

第五話 ツンデレ野郎はいざって時にもツンとする。(後書き)

どうも江藤みそらです。

そうです。新八総受けです。

だって新八可愛いですもん。

読んで下さりありがとうございます。

最後までよろしくお願いします。

第六話 恋人に先立たれる事程悲しいことはない(前書き)

新八の想い。



「俺を…見てくれよ…」

「土方…さん…」

優しい温もり。

だけど…違う…

貴方ぎんさんじゃない…

・・・

あなたの温もり…肌が…心が覚えてる…

貴方ひじかたさんじゃない…

僕は…

「辛いんです…」

「え…?」

「銀さんの居ない世界で生きるのが…辛いんです…」

「おまえ…」

涙が溢れて…止まらなくて…

「もう嫌だ…」



もう…

もう…

「シニタイ

?……」

それが…新八の最後の言葉だった…

彼は自傷行為を幾度となく繰り返し…

まるで、壊れた人形のように変貌した

?…

《シニタイシニタイシニタイ

?…》

《ドウシテドウシテドウシテ ？…》

何度も繰り返される……

《ドウシテ僕八生キテイルノ ？？》

繰り返される想おもい……

耳をふさいでも…聞こえてくるのです…

第七話 うるさいのは大体上階の住人です（前書き）

お登勢さん達です。

## 第七話 うるさいのは大体上階の住人です

「静かだねえ……」

フフツと笑う。

「……行っちゃいましたね……皆さん……」

たまが言った。

静まり返った家の中。

家賃徴収もしなくていいし、

燃えるごみの日にゴミ捨て場ではっている必要はない。

あの白髪パーマが払わなかった家賃は、煙草吹かした奴が変わりに  
払ってくれた。

二階はもう誰もいない空家。  
よろずや

チャイナ娘は真選組へ行った。真選組けいさつに入るらしい……

全く……おかしな世の中だよ……ホント……

アイツが死んでさ……メガネがおかしくなっさ……チャイナが警察に  
なっさ……

《死人が口なんて聞くか……だから一方的に約束した。》

ホント……信じらんないねえ……

《あなたの代わりに……俺が護ってやるって……》

不死身だと思ってたんだけどねえ…

「才登勢サン、腹減ツタヨ。」

キャサリンが言った。

「…そうだねえ…焼肉でも食べるかい？」

お登勢の返答にたまとキャサリンは驚いた。

だってそれは…ツツコミがなかったから……

第七話 うるさいのは大体上階の住人です（後書き）

新八についてはまた次話で…

第八話 どんな魔法使いも時間だけは操れなかった（前書き）

新八奇跡だあ。

お前の話が狙ってねえのに八話だって。

そんなに書いてるって。

皆様！！もうそろそろ終わらせませます。

## 第八話 どんな魔法使いも時間だけは操れなかった

「新八君、朝食は「ジミー特製昨日の残りのカレー」だよ!」

「二日目になるとコクが増すらしいアル。ジミーが言ってたヨ」

「新ちゃんお願い。一口でいいから食べて?」

真選組 屯所

その新八の姿はあった。

日当たりのいい少し大きめな部屋。

刃物など、自害するのに使えるものは新八の部屋には持ち込まない。それが今は新八と会うための条件。

今この部屋にいるのは、新八を含め、近藤、神楽、お妙。

三人は新八にカレーを食べさせようと必死。だが新八は、どこか遠くを見つめていた。

白く痩せ細った新八の腕が、袴の袖から覗く。

そこには刃物でつけられた無数の傷跡。

どれも深く。赤く腫れている。

神楽はそんな新八を見て心が痛む。

涙が少し潤む。その度にお妙の大きな瞳は揺れる。

近藤はポンポンと優しくお妙の頭を撫でる。



そしてお妙は涙を一つ、また一つと流す。

皆の表情かおから、銀時がいなくなつてから笑顔が消えた。

いや完全に消えたわけではないが、仮面のような笑顔、または皮肉な笑顔。

憎らしいほどに照りつける朝日は…残酷に過ぎて行く時は…

誰の傷も癒しはしない。

トントン

静かなノック

「ちよつと入りやすぜい」

第九話 宅配便ってたまにいいところに来るよね

「どうした？総悟」

「新八君にお客でさあ」

沖田に連れられやってきた人物。それは…

「お久しぶりでスノート」

寺門通。新八がやたら応援するアイドルの姿であった…

「いつも新八君には応援してもらったし…道標にもなってくれた…だから…私はその恩返しに来ました。」

真っ直ぐな瞳。曇りはない。

皆はお通に新八を任せ部屋を出た…

.....

？台所

「オイ、ザキ」

「何ですか〜副長〜？」

何故だか、誰のなのか…ふりふりのエプロンを着た山崎退が皿洗いをしていた。

「…それは突っこんだ方がいいか？」

「いや、江藤の奴が早く進めたそうだからやめて下さい。」

ゴホンと咳払いを一つ吐き土方は言った。

「寺門通を呼んだのはお前だな」

その言葉に山崎は表情を変えず「へえ」と答えた。

「新八君には光になるものが必要かと思いましてねえ」

「それで寺門通か？」

「最初はクリスマスツリーを飾ったんですが新八君ウケてくれなくて…」

「そりゃウケねえって…」

白い煙を吐きながら苦笑い。

「新八君のツッコミがないとボケの無法地帯だし、

自分達で抑えないといけないからつまらないですしねえ」

あははつと陽気に笑う。

ポンツと土方は山崎の頭を叩いた。

「アイツは笑はねえとな…<sup>アイツ</sup>銀時も報われねえもんな…ありがとな。」

山崎は少し笑ってから「副長の為じゃないですからね」と言った。

第九話 宅配便ってたまにいいところに来るよね（後書き）

土山？土方×山崎？

第二の夫婦？なんか嫌でイ…

第十話 ミニスカーニーハイはマジ神だと俺は思う。(前書き)

おっかぐです。

第十話 ミニスカ×ニーハイはマジ神だと俺は思う。

「何でアイツが居るアルか!？」

同じ隊服に身を包んだ彼女は言う。

ピンクの髪。空色の大きな瞳<sup>め</sup>

白い手が伸びる…

殴られるかなーと思って歯を食いしばったけど、何も起こらない…  
閉じていた瞳を開けた…

「何泣いてるんでい」

零れ落ちる大きな雫。美しく輝く。まるで宝石のように。  
白い頬に手を伸ばした。触れても怒らない。

「…涙に弱いつて、前にも言ったでしょう?」

「うるせー…」

そっと、抱き寄せる。

小さな体を。

指を通り抜ける、長い髪。

グイッと顔を上げる。俺を映す強気な目。

「ちょっとそそるねえ」

率直な感想を述べた。「離せヨ」と言う罵声を浴びる。  
それを無視して続ける。

「キスしていい？」

しばらく、固まってから、顔を真っ赤にして怒る。それがとんでもなく、愛おしいと思う。

優しいキスを送る。

甘いキスを送る。

それから、彼女を見つめて俺は言った。

「旦那はお前おめえらがいる限り、永遠に生き続けるんδει。自分の心おめえなかで…」

そう告げて、またキスをする。

温かいキス …

「お前ら、人目の付くところでイチャつくんじゃねえ！！超目障り！！」

と、思ったら、思わぬ邪魔が入った。

「人の恋路を邪魔する奴あ、今ここで斬られて死ね。ですぜ？土方さん。」

いつか仕返ししてやらあと、ほくそ笑みながら、

「雪三！！」

「ほんとでい」

・  
・



また冬が来た。

第十話 ミニスカーニーハイはマジ神だと俺は思う。(後書き)

神楽ちゃんが泣いていた意味は、

「銀ちゃんが消えちゃう」だそうです。

**第十一話 進言します！！AKBに三つ編み×眼鏡×どじっ娘の新メンバーをー**

前話のアクセス解析。沖神のとこだけ、ニケタでした。

流石だねえ 沖神：銀土やったらウケるのかな？絶対やりません。

土方氏は、土山で行くんで。

第十一話 進言します！！AKBに三つ編み×眼鏡×どじっ娘の新メンバーをー

「軍曹さんに聞いて…もしやって思っ「僕。」

お通の言葉を遮った。そして続ける。

「お通ちゃんのファン、失格だよね…」

そう呟いた。

「…あの銀髪の人…死んじゃったんだってね。」

お通は重苦しく告げた。

新八の目が大きく見開かれる…

その言葉は…禁句だったのだ…

だぁー…んっツツ…!!

お通は床に打ち付けられる。

「きゃあああつー!!」

彼女の悲鳴と共に。部屋に入ってくる人達…真選組だ…

白い腕に伸びる鮮血。

新八の眼鏡が落ちる。

「離せええええッッッ！！！！！」

新八の、悲痛な叫びが響く。

「うあああああつっ！！！！！」

流れ落ちる大粒の涙。

取り押さえる隊員たちに対抗する、小さな体。

時は心の傷を癒すとか、どっかの誰かが言ってた気がするが…

「そんなの…嘘よ…」

ポツン…

ポツン…

涙が滴る。

「だったらどうして…新八（あつ）を…助けてくれないの…？」

「…お妙さん…」

只…悲しい…切ない…貴方が居ないだけで…

貴方の居ない世界の…時間（とき）が動かない  
…

《ドウシテ僕ヲ置イテイクノ…？》

失くしちゃいけなかった…あの男を…

《銀サアアアアアアアンツツツ！……！！》

もつけない貴方は…彼を助けられない…

彼を…彼の…光になる人は…？

第十一話 進言します！！AKBに三つ編み×眼鏡×どじっ娘の新メンバーをー

えっと、この小説、どなたかがお気に入りにしてくださったみたい  
で…

誰だかわからないんですが、ありがとうございます…！！

第十二話 依存してるのに、お互いは気づかない（前書き）

最終章です!!



## 第十二話 依存してるのに、お互いは気づかない

「ごめんなさいッッ!!」

お通は頭を下げた。

理由は、新八。

「まあ…知らなかったってんならね、今度から気よ付けてね。今は鎮静剤で眠ってるけどさ、また暴れるかもしれないから、そしてこれ飲まして。」

胡散臭そうな医者に薬を渡される近藤。

以下にももぐり。いやもぐりだけど。

「彼の精神状態はね、まるで硝子の糸なの。ちょっと触れただけで壊れちゃう。」

へ々に彼を刺激しなようにね？前にも言ったけど、また斬っちゃったら、死んじゃうから。」

淡々と告げる。

「き…？切っちゃっ…？」

顔を上げるお通。

「実はヨ」と神楽が言った。

「前、刀で手首切って、危うく死ぬ所だった時があっ…あとフォ

「クとか…色々…」

お通は理解した。

だから部屋にあげられる前に、あんなに細かく身体チェックがあったのか…

医者が去った。

お通は、縁側に座らされた。

「ほい。これ食べヨ。」

「ありがとう。」

渡された饅頭。温かい。

「屯所の冷蔵庫に入ってたの、チンしただけアル。変な味したらい

えヨ。」

「は…ハイ。」

甘いあんこ。

「新八な、銀ちゃんが好きなんだヨ。分かったかもしれないけど。」

神楽さんの言葉に静かにうなづく。

「あの二人は付き合ってたアル。」

「え？」と聞き返し、神楽さんの顔を見た。

遠くを見つめて、言った。夜空に輝く星たち…

「銀ちゃんはな…新八を守って死んじゃったアル…」

神楽さんは続けた。

「…新八はその時の記憶が無いんだ…」

運命の歯車は…いつでも狂わせることが出来る…

第十二話 依存してるのに、お互いは気づかない（後書き）

過去編行きます!!

第十三話 誘拐犯は、色んな意味で大抵歪んでいたりする（前書き）

あ、残酷描写が強いかもです。気をつけて！！皆様あ！！

第十三話 誘拐犯は、色んな意味で大抵歪んでいたりする

法外な料金。おかしいとは思っていたんだよ。

…

「新八を…どこにやった」

夜叉は告げた。

「ふっ…知りません、そんな事」

男は言った。

《絶対やめた方がいいですよ!!》

《…なんか嫌な予感がするんですよ…》

哀しい瞳。絶キミるような瞳

君の忠告を聞かず…

「私の奴隷となった、彼なら知っていますか…」

「何だと…?」

「ふっ…流石ですね。流石、幕末の獅子…白夜叉…」

聞きなれた。過去の名前よひな

「何驚いているんです？」

白夜叉：貴方に選択肢をあげましょう…」

男はそのまま続けた。

「吉…私の飼い犬となる…」

「はあ!？」

「忒…」

冷やかな目。重い空気。

突きつけられた刃物：錆びついた、鉄の香りが、鼻を突いた…

「ここで死ぬか …」

夜叉は言った。

「殺せるもんなら殺してみろ…新八は、絶対に渡さねえ!!」

真剣を振りかざし

戦場を舞う姿は、まさしく夜叉。

「是非…手に入れたいねえ…」

男は微笑む。

「あの美しい、獅子を…」

紅く、妖しく光る…獣の瞳。  
血に染まってゆく、白髪。

男は…顔を歪ませた…

「死ね…」



第十三話 誘拐犯は、色んな意味で大抵歪んでいたりする（後書き）

あと1話過去編。

第十四話 優しいって、いったいどういう事だろう？ 知るかよ

「新八！！！！」

「銀さんっ！！！！」

抱き寄せる。強く。だけど優しく。

「貴様あ！！！！」

「来なすったか…大人しく寝ててくりゃよかったのになあ」

スックと立ち上がる…夜叉。

ザツと、100人位の兵隊<sup>テキ</sup>  
中心に立つ人物。血まみれだ。

「親方さん？早く寝ちまえって、」

「ふざけるな、」

「死に曝せえええええ！！！！夜叉ああああああ！！！！！！」

崩れ落ちて行く。敵。

「銀ちゃん！！加勢しに来たアル！！！！」

現れた仲間。

光る眼。

「死ぬのは…お前だよお」

キーンッ！！

刀がぶつかり合う。音。  
にやりと笑う、白夜叉。

バツ！！！！

「銀さんッ危ないッッ！！！！」

背後に、一人。  
思わず駆け出す。

目の前が暗くなる…  
紅く染まる…

それが最後の時

…

第十四話 優しいって、いったいどういう事だろう？ 知るかよ（後書き）

銀さんは、ここで死んじゃうんです。出血大量とかで。無いよう薄くて誠にすみません。

**第十五話 残酷なほどこの目に君の笑顔が焼き付いているって痛ッ！！（前書き**

次の話で、強制終了させる予定です。

第十五話 残酷なほどこの目に君の笑顔が焼き付いているって痛ッ！！

連れて行かれた先。  
貴方の墓の前。

「何ですか？突然？」

そう…銀さんの…

「もっと…取り乱すと思ったんだが…」

土方が言った。

「…しばらく、一人にしてくれませんか…？」

「…分かった…行くぞおザキ。」

「え？はっ、はい」

二人は、その場を去った。

「いいんですか？」

ザキは言う。

「ああ…大丈夫だろ…」

土方は笑った。

ポンツと手を置く。

「団子でも食つかあ」

「え？ええ？？ちよつとおお？？？」

銀時<sup>ヤロ</sup>なら新八<sup>アイツ</sup>を連れてはいかない。

そんな絶対的な自信が、俺<sup>ひじかた</sup>にはあつた

：

第十五話 残酷なほどこの目に君の笑顔が焼き付いているって痛ッ！！（後書き

説明、はしょりまくりです！！

質問等があったら、どうぞ！！お気軽に！！

感想等もお待ちしております！！



第十六話　ねえ、もう一度微笑んで…？

そつと、撫でる。

「ふっ…」

言葉を漏らした。

「ふっざけんじゃねえよっツツ！…！！…！！…！！  
この天パあああああ！！…！！…！！」

大声で叫ぶ。

「給料まだもらってないんですけどおお！！…！！…！！…！！  
僕たちおいて死んでんじゃねえよ！！…！！」

不満(?)を漏らす。

「カツコイイと思ったんですかああ？…？…？  
僕の為なら死ぬるとか、痛いんだよこのマダオおおお！！…！！」

止まらない。言葉。

「…残された人たちは…どれだけ辛いと思っているんですか…」  
零れ落ちる涙。

アンタの為だけに、どんだけ泣いたと思ってんだよコノヤロー

その時。風が吹いた。温かい…風…

「ぎ…銀さん…？」

抱きしめられる感触。

また涙が出てきて。止まらなくて。

《ゴメンな…》

耳元でそう囁かれた。

僕の名前を呼ぶ…声…

僕を抱く、大きな手…

・  
・

それと、何よりもその笑顔が好きだった。

囁かれた耳が、熱を纏う。

「本と…バカ…」

たとえこれが、幻でも、夢オチだったとしても。

嬉しかった。

「僕に会いに来てくれたって、勘違いしてても…いいんですよ？」  
そつと。頷いた。

「また、逢いましょうね…いつか…」

《ああ…愛してる…新八…》

「僕もです…銀さん…愛してる…」

ねえ、もう一度微笑んで？

君だけに見せる笑顔

優しい笑み

温かい胸に包まれていたい

またそんな日が来ればいいって、願ってる

…

第十六話 ねえ、もう一度微笑んで…？（後書き）

もう一話。

第十七話 最終話に題名をまんま使うのは、別にめんどくさい訳じゃ無いから

旦那の墓石前。

彼女は佇んでいた。

「おい神楽。」

名前を呼ぶ。振り向く、蒼い瞳

「食う?」

「ありがとう」

饅頭を差し出す。

「これは旦那の分 ……」

ひと箱置いた。

墓石に咲く、色とりどりの花。

「どうしたんでさあ、この花。」

「新八アル。」

飾り立てる。花。綺麗な、花。

ふと、真紅の菊が、目に止る。

「この花さあ ……」

神楽はにやりと笑い、言った。

「惚気アルな」

ひひっと笑う。

「ホントでい。」と俺は頷いた。

真紅の菊の花言葉は、「愛しています」

似合わず、旦那の墓に咲いていた、黄色い花、ミヤコグサ  
花言葉は「また逢う日まで」

「臭いバカップルでい」

俺は呟いた。

未来…

「起きろ!!沖田!!」

バコッ

「いてっ。痛いじゃないですかい 銀八先生 八恵。助けて。」  
「総子ちゃんが寝てるからでしょ。」

バコッ。

「土方あ!!なんだその本はあ!!」

「マヨネーズ大百科。」

ボソリ

「そんな本あるんだ…」

「自費出版だ。」

「売れなかったアルか。」

クスッ

「!!!」

あの二人は、また出会う

…

磁石みたいに、お互いに…また惹かれあう

…



**第十七話 最終話に題名をまんま使うのは、別にめんどくさい訳じゃ無いから**

最終話です。読んでくれてありがとうございました。

感想質問、厳しい評価等。お待ちしております。

第十八話 新八の八は八位の八なんですね。はい（前書き）

十七まで行ったので。雑談で十八話<sup>はちわ</sup>め？（クスッ）

## 第十八話 新八の八は八位の八なんです。はい

悦威（以下悦）「うおっしやあああああああ！！！！脱ぐぞお  
おおおお！！！！」

新八（以下八）「いや待て待て待て待てえええええええ！！！！」

銀時（以下銀）「…何で新八あえて八？おめえの悦のがヤバくない  
？」

悦「お待たせしました！！銀新雑談会 暇な奴はとりあえず見とけ  
よ 開幕 …！！」

銀、ハ「いや、待ってない待ってない。」

ハ「えっと、注意だそうです。」

- ・悦威は銀新を愛しすぎている。
- ・悦威は前に銀魂見てた時、季節外れの万事屋のどてら姿は家族に  
しか見えなかった。
- ・悦威は四天王編の際、新八に向かって「マミイイイ！！！」と  
叫んだ
- ・悦威はウサ耳よりネコ耳派である。

…だそうです。」

銀「要約すると、つまり、変態と。」

悦「そうだけど、なんか銀さんに言われたくない。」





俺たちの同人小説とか書き始めるから」

八「……」

八「そつだ銀さん。」

銀「あん？」

八「明日甘いもの食べるの禁止ですから。」

嘘だろおおおおおお！！！！！！  
by 銀時

第十八話 新八の八は八位の八なんです。はい（後書き）

悦威の穴埋め。悦威の脳内。

あゝあゝもうだめだゝ

ここまで読んで下さった皆様！！有難うございました！！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1928t/>

---

ねえ、もう一度微笑んで...?

2011年9月4日15時27分発行